

ゆで豆用ラッカセイ ‘ユデラッカ’ の 品種特性と早期収穫技術について

坂本 英介・上原 義彦^{***}

On the Growth and Seed Characteristics of the New Peanut Variety ‘Yuderakka’ for ‘Boiled Pods’, and Its Early Harvesting Culture.

Eisuke SAKAMOTO and Yoshihiko UEHARA

緒 言

近年、ゆで豆用ラッカセイは、そのおいしさが広く知られるようになり、また、従来の乾燥莢での出荷に比べ収益性が高いことが明らかにされ¹⁾、水田転作への導入にも適しているため栽培農家が増加する傾向にある。

ラッカセイのゆで豆は枝豆と同じようにビールのつまみ等として利用されるため7月からの早期出荷が望まれていた。早期出荷するためには、ゆで豆に適した早生品種の選定とその品種に適した早期収穫技術についての検討が必要である。

ゆで豆用ラッカセイの栽培方法については山本²⁾らにより既に1960年代より試験が開始されているが、ゆで豆加工を前提とした品種選定は行われていなかった。

現在、早期出荷用として栽培されている早生品種の‘タチマサリ’は莢の外観品質と食味が劣ることから、これに替わる品種の選定が求められていた。ゆで豆用ラッカセイとして望まれる品種特性としては、食味の他に莢の外観品質が重視されるため、収穫時に付着した土壌が容易に洗浄できる莢型であること、莢褐変症の発生が少ないことなどがあげられる。そこで本試験では食味調査とともに莢のくびれの程度に注目し、従来行われていた5段階の客観評価³⁾に替わる指標としてくびれの数量化を試み、水洗後の土壌の付着程度との関連について検討

した。その結果、新しい知見が得られたので報告する。

さらに、ゆで豆用品種として本県の推奨品種に選定した‘ユデラッカ’の特性調査結果と本品種を用いた早期収穫のための栽培方法についてもあわせて報告する。

‘ユデラッカ’は、千葉県農業試験場落花生研究室（農林水産省らっかせい育種指定試験地）において1976年‘タチマサリ’を母に、‘八系161号（後のナカテユタカ）’を父として人工交配を行い、その雑種後代から選抜固定され、ゆで豆用ラッカセイに適した品種として始めて育成され、1991年6月にらっかせい農林11号として登録された¹⁾。系統番号は、‘八系318号’（1986～1988年）、‘関東68号’（1988～1990年）であるが本稿では‘ユデラッカ’で統一した。

1. 試験方法

(1) 莢型と水洗後の土壌付着との関係について

ア. 栽培方法および試料の調整方法

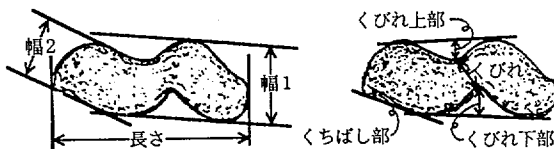
栽培方法は露地普通栽培であり、栽植密度は畦幅60cm、株間20cm (8.3株 m^{-2})とし、a当たり施肥量は、稲わら堆肥100kg、苦土石灰10kg、化成(N:P₂O₅:K₂O=3%-7%-10%) 6kgとした。供試は場の土壌は灰色低地土加茂統である。試料として、1989年5月16日に播種し9月7日に収穫した‘ナカテユタカ’の莢を用いた。収穫後の莢1kg程度を直径と深さがそれぞれ30cmのステンレス製の円筒状のかごに入れ、水を入れたコンテナの中で1分間程度軽く手洗いした後に調査した。

イ. 調査方法

^{*}本試験の一部は1989年作物学会関東支部会で発表した。

^{**}現神奈川県伊勢原地区農業改良普及センター。

成熟莢100個について第1図に示した各部について計測および土壌の付着程度を調査した。莢のくびれの程度は第1図の‘くびれの幅’を莢の‘幅1’で割った値を‘くびれ度’とした。土壌の付着程度は、付着した土壌の厚さが1mm以上を3、1mm以下を2、僅かに観察出来る程度を1、付着が見られない場合を0とした。



第1図 莢の測定及び観察部位

(2)有望早生品種系統の選定及び特性調査

ア. 所内試験

(ア)供試品種および系統

1988年より1990年までの3年間に千葉県農業試験場落花生研究室より配布された計20品種、系統のうち‘タチマサリ’程度の早生品種系統である‘タチマサリ’、‘ユデラッカ’、‘関東62号’、‘関東63号’および比較品種として‘ナカテユタカ’を供試した。

(イ)栽培方法

栽培方法は露地普通栽培であり、1区10.8m²、3区制とした。播種はそれぞれ1988年5月10日、1989年5月16日、1990年5月11日とした。栽植密度は畦幅60cm、株間20cm(8.3株m⁻²)とし、肥料としては、a当たり稲わら堆肥100kg、苦土石灰10kg、化成(N:P₂O₅:K₂O=3%-7%-10%)6kgを施用した。ゆで豆としての収量調査については透明マルチ資材を利用してマルチ栽培で検討した。播種は1989年5月16日、1990年5月11日とし、調査時期はそれぞれ8月25日および8月20日とした。栽植密度および施肥量は普通栽培と同一とした。

(ウ)調査方法

落花生調査基準³⁾に基づき第4表に示す各項目について調査した。莢の褐変症状については、莢褐斑病⁵⁾の他に莢全体が褐色になるものを含めて莢褐変症として表した。食味調査は、す煎りした子実を試料とし、‘ナカテユタカ’に比較し、まずいを-2、ややまずいを-1、同程度を0、やや美味しいを1、美味しいを2とし、パネラー(18名)の平均値で評価した。

イ. 現地試験

秦野市横野と綾瀬市深谷の2カ所の現地ほ場において、

‘タチマサリ’、‘ユデラッカ’、‘関東62号’、‘関東63号’および比較品種として‘ナカテユタカ’を供試してゆで豆用ラッカセイとしての適性調査を行った。

(ア)栽培方法

栽培方法は、ほ場とも畦幅60cm、株間24cmのマルチ栽培とし、1区15m²の2区制で検討した。播種は、秦野では1989年5月16日、綾瀬では5月15日に行った。

(イ)調査方法

調査時期は、秦野では8月25日、綾瀬では8月24日とし、第4表の各項目について調査した。食味調査は、沸騰水で30分程度ゆでた莢を試料とし20名のパネラーにより(2)ア-ウ試験と同一な方法で行った。

(3)‘ユデラッカ’に適した栽培法について

ア. 被覆資材利用による早期収穫法

(ア)使用資材

マルチには光崩壊型マルチフィルムを、べた掛け資材にはポリプロピレン製長繊維不織布を、トンネル被覆には16穴パンチフィルムを使用した。

(イ)試験区の概要

①マルチのみ②マルチ+トンネル③マルチ+べた掛けの3区について1区100m²、3区制で検討した。

(ウ)栽培および調査方法

栽培管理としては1990年4月27日に施肥、マルチ被覆、播種、べた掛け又はトンネル被覆を行い、5月30日にべた掛け除去を、6月25日にトンネル除去を行った。

a 当たり施肥量は、稲わら堆肥100kg、化成(N:P₂O₅:K₂O=3%-7%-10%)6kgとした。調査は7月24日、8月8日、8月21日に収穫して脱莢・水洗した生莢を、成熟莢(網目が明瞭でラッカセイ特有の灰紫色を呈するもの)、中間莢(網目がやや不明瞭でやや赤味をおびたもの)、未熟莢(白色で柔らかく出荷に適さないもの)の3種類に選別し、成熟莢と中間莢の合計重量を出荷適莢重とした。

イ. 早期収穫のための播種期と栽植密度について

(ア)試験区

播種期を①4月中旬②4月下旬播種の2時期とし、m²当たり株数を①11.1株②9.3株③6.9株の3水準(1992年は①と②の2通り)とし、播種期とm²当たり株数を組み合わせて検討した。

(イ)栽培方法

光崩壊型マルチフィルムとポリプロピレン製長繊維不織布を利用してマルチ・べた掛け栽培で行い、べた掛け資材は開花期に除去した。播種は4月中旬播種区では1991年4月15日と1992年4月14日、4月下旬播種区では1991年4月30日と1992年4月27日に行った。畦幅は全区

60cmとし、株間を①11.1株区で15cm, ②9.3株区で18cm ③6.9株区で24cmとした。a 当たり施肥量は、稲わら堆肥100kg, 化成(N:P₂O₅:K₂O=3%-7%-10%3-7-10) 6kgとした。

(ウ)調査方法

1991年8月5日と1992年8月3日に生育調査を、1991年7月15日と8月5日および1992年7月20日と8月3日に(3)-ア-(ウ)試験と同一の方法で収量調査を行った。

2. 試験結果

(1)莢型と水洗後の土壌付着との関係について

莢の各部の測定値と水洗後の土壌付着を第1表に示した。生莢のくびれ上部は下部に比べくびれがやや深い傾向がみられ、水洗後の土壌付着量はくびれ上部に最も多く、くびれ下部がそれに続き、全体にくびれ部に多い傾向がみられた。くびれの程度とくびれ度の関係を第2図に示したが、くびれの程度は、くびれ度が大きくなる程小さくなる傾向がみられた。くびれ部の土壌付着程度と

くびれ度の関係を第2表に示した。土壌付着程度は、くびれ度が0.66以上では少なく、0.41以下では多い傾向がみられた。

(2)有望早生品種系統の選定及び特性調査

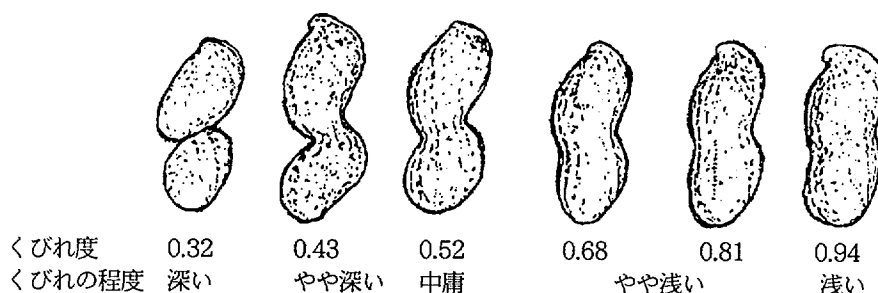
ア. 所内試験

早生系統の生育収量調査結果を第3表に示した。供試系統のうちタチマサリ程度の早生は4系統であり、成熟期は‘関東62号’と‘関東63号’が‘タチマサリ’に比べ3日程度早く、‘ユデラッカ’は‘タチマサリ’と同程度であった。莢褐変症の発生程度は、‘ユデラッカ’と‘ナカテユタカ’で少なく、‘タチマサリ’と‘関東62号’で多かった。特に‘タチマサリ’では莢全体が褐色になる症状が多くみられた。くびれ度は、‘ユデラッカ’と‘タチマサリ’で大きく、‘関東62号’で小さかった。収量(乾燥莢)は、‘タチマサリ’に比べ‘関東63号’が多く、‘関東62号’が少なかった。煎り豆の食味は、‘タチマサリ’に比べ‘関東62号’と‘ユデラッカ’がすぐれていた。

第1表 開花後62日における‘ナカテユタカ’の莢の部位と土壌付着程度との関係(1989年)

部位	くびれ部			くちばし部	その他
	上部	下部	計		
土壌付着程度 ²	1.1 ± 0.9	0.6 ± 0.9	1.7 ± 1.4	0.6 ± 0.9	0.3 ± 0.8

Z; 土壌付着程度は, 3; 厚さ1mm以上, 2; 厚さ1mm以下, 1; 僅かに付着, 0; 付着していない, の4段階とした。



第2図 莢のくびれ度²とくびれの程度

Z; くびれ度は第1図の‘くびれ’を‘幅1’で割った値。

第2表 くびれ部(上部+下部)の土壌付着程度とくびれ度の関係(1989年)

土壌付着程度 ²	0~1	2~3	4以上
くびれ度 ³	0.66 ± 0.08	0.53 ± 0.09	0.41 ± 0.10

Z; 土壌付着程度は第1表と同様。

Y; くびれ度は第1図の‘くびれ’を‘幅1’で割った値。

第3表 早生系統の成熟期における莢の外観品質と食味の比較 (神奈川県農業総合研究所ほ場 1989年)

品種・系統	成熟期 月日	莢の外観品質		乾燥莢実重	煎り豆 ^Y の食味
		莢褐変症 ^Z 発生程度	くびれ度 ^Y		
関東62号	9.11	5.0	0.42 ± 0.16	26.7kg ^a ⁻¹	+ 0.2
関東63号	9.10	4.0	0.64 ± 0.10	29.7	- 0.1
ユデラッカ	9.14	2.0	0.78 ± 0.08	28.0	+ 0.1
対) タチマサリ	9.14	5.0	0.72 ± 0.09	28.7	- 0.1
比) ナカテユタカ	9.25	2.0	0.57 ± 0.11	37.1	(± 0)

Z; 莢褐変症の発生程度は、無; 0, 微; 1, 少; 2, 中; 3, 多; 4, 甚; 5の6段階で評価した数値の平均値。Y; 煎り豆の食味は、'ナカテユタカ' に比較して、まずい: -2, ややまずい; -1, 同程度; 0, やや美味しい; +1, 美味しい; +2の5段階で評価した数値の平均値。(パネラー数は18名) Y; くびれ度は第2表と同様。

イ. 現地試験

秦野市と綾瀬市の現地試験の平均値を第4表に示した。主莖長と最高分枝長は'タチマサリ'が最も長く、ついで'ナカテユタカ'と'関東63号'であり、'ユデラッカ'が最も短かった。

莢褐変症の発生は'ナカテユタカ'と'ユデラッカ'

で少なく、'タチマサリ'と'関東62号'で多い傾向がみられた。生莢重は'タチマサリ'で最も多く、'ナカテユタカ'で最も少なかったが、出荷可能と考えられる成熟莢と中間莢の合計の割合は'ユデラッカ'が最も大きかった。ゆで豆の食味は'ユデラッカ'が最も良く、'タチマサリ'が最も悪かった。

第4表 早生系統のゆで豆用収穫適期における生育及び収穫莢と食味の比較(神奈川県秦野市と綾瀬市の現地ほ場 1989年)

品種・系統	主莖長	最高 分枝長	莢褐変症 ^Z 発生程度	生莢重	出荷可能 莢割合	ゆで豆 ^Y の食味
関東62号	29.8cm	36.7cm	3.0	58.1kg ^a ⁻¹	73%	- 1.1
関東63号	34.9	41.4	2.5	60.9	76	- 0.9
ユデラッカ	29.8	34.2	1.5	59.0	80	+ 0.4
対) タチマサリ	43.4	47.3	3.5	61.6	74	- 1.6
比) ナカテユタカ	34.4	41.1	1.0	48.1	78	(± 0)

Z; 莢褐変症の発生程度は第3表と同様。Y; ゆで豆の食味は表3と同様。(パネラー数は20名)

ウ. 'ユデラッカ' の特性

'ユデラッカ'の特性調査結果を第5表に示した。開花期は'タチマサリ'より1日遅いが、成熟期は'タチマサリ'と同程度であった。総分枝数は'タチマサリ'とほぼ同程度であり'ナカテユタカ'より少なく、主莖長と分枝長は短く、地上部の生育量が小さい傾向がみら

れた。上実百粒重は'タチマサリ'とほぼ同程度であり'ナカテユタカ'より小さく、子実もやや小さい傾向がみられた。食味は'ナカテユタカ'とほぼ同程度であり、'タチマサリ'より優る傾向がみられた。ゆで豆としての取量は、出荷可能莢重は'タチマサリ'に劣るものの、成熟莢重では最も高い値を示した(第6表)。

第5表 ユデラッカの地上部及び地下部の生育特性 (1988~1990年)

品種	開花期 月・日	成熟期 月・日	病害等の発生程度 ^Z				主茎長	分枝長
			倒伏	褐斑病	汚斑病	莢褐変症		
ユデラッカ	6.28	9.14	0	0.7	1.0	1.7	25.5cm	30.2cm
対) タチマサリ	6.27	9.13	0.7	1.0	1.3	4.0	30.7	38.8
比) ナカテユタカ	6.29	9.24	0.3	1.0	2.0	2.0	29.9	38.3

品種	総分枝数	上莢数	莢実重	子実重	上実百粒重	子実の品質 ^Y	煎り豆 ^X の食味
ユデラッカ	11.3本	21.6莢/株	33.3kga ⁻¹	25.2kga ⁻¹	78.1g	2.0	+0.2
対) タチマサリ	9.9	19.9	34.6	23.6	79.4	2.3	-0.7
比) ナカテユタカ	25.6	25.1	41.7	30.6	92.2	1.3	(±0)

Z; 病害等の発生程度は第3表と同様。Y; 子実の品質は、上; 1, やや上; 2, 中; 3, やや下; 4, 下; 5の5段階で評価した数の値の平均値。X; 煎り豆の食味は第3表と同様。'タチマサリ'の食味は1989~1990年の平均。

第6表 ユデラッカのゆで豆としての収量比較 (1989~1990年)

品種	出荷可能莢重	成熟莢重	成熟莢の割合
ユデラッカ	55.3kga ⁻¹	46.5kga ⁻¹	84%
対) タチマサリ	71.3	43.8	61
比) ナカテユタカ	49.8	33.4	67

(3) 'ユデラッカ' に適した栽培法について
ア. 被覆資材利用による早期収穫法
被覆資材の利用が生育・収量に及ぼす影響を第7表に示した。開花期は、べた掛けおよびトンネル被覆により10日程度早まる傾向がみられた。主茎長は、トンネル被覆で最も長くなる傾向がみられ、べた掛け被覆ではべた

掛け除去時期まではマルチのみより長く、それ以降はマルチのみと差がなくなる傾向にあった。出荷可能莢重は、べた掛け被覆でマルチのみに比較して7月下旬では137%, 8月上旬では111%と増加する傾向がみられたが、トンネル被覆ではいずれの調査時期においてもマルチのみと同程度であった。

第7表 被覆資材利用が生育・収量に及ぼす影響 (1990年)

試験区	開花期 月日	主茎長			出荷可能莢重		
		調査月日			調査月日		
		5.30	6.25	8.21	7.24	8.8	8.21
マルチ+べた掛け	6.1	8.8cm	18.0cm	28.6cm	38.6kga ⁻¹	62.3kga ⁻¹	63.0kga ⁻¹
マルチ+トンネル	6.2	-	37.6	43.2	29.2	56.1	65.8
マルチのみ	6.13	3.3	17.5	31.1	28.1	55.9	64.4

イ. 早期収穫のための播種期と栽植密度の検討

生育と収量に及ぼす播種期と栽植密度の影響を第8表に示した。いずれの播種期においても m^2 当たり株数が多いほど主莖長が長くなり、分枝数が少なくなる傾向がみられた。出荷可能莢重は、いずれの播種期および調査時期においても $6.9株/m^2$ で少ない傾向がみられた。

$11.1株m^{-2}$ 区と $9.3株m^{-2}$ 区の出荷可能莢重を比較すると、4月中旬播種の場合は、 $11.1株m^{-2}$ 区が1992年度では多収となり、1991年度ではやや低収となる傾向がみられた。4月下旬播種の場合は、7月中旬調査では $9.3株m^{-2}$ 区が、8月上旬調査では $11.1株m^{-2}$ 区が優る傾向がみられた。

第8表 播種期と栽植密度がユデラッカの生育・収量に及ぼす影響

試験年次	播種期 月旬	m^2 当たり 株数	開花期 月.日	主莖長	総分枝数	出荷可能莢重 ($kg a^{-1}$)		
						7月中旬調査	8月上旬調査	合計
1991	4中・11.1株		5.24	29.9cm	10.8本	39.8(93) ²	49.6(100) ²	89.4(97) ²
	4中・9.3株*		5.24	31.0	12.6	42.9(100)	49.7(100)	92.6(100)
	4中・6.9株		5.24	28.1	15.0	36.8(86)	43.1(87)	79.9(86)
	4下・11.1株		6.2	32.7	10.8	36.2(92)	46.2(112)	82.4(101)
	4下・9.3株*		6.2	29.4	10.7	39.4(100)	42.4(100)	81.8(100)
	4下・6.9株		6.2	28.1	12.8	33.1(84)	41.1(97)	74.2(91)
1992	4中・11.1株		5.24	27.8	9.6	26.3(127)	44.9(131)	71.2(129)
	4中・9.3株*		5.26	26.4	10.6	20.7(100)	34.3(100)	55.0(100)
	4下・11.1株		6.5	24.7	9.4	22.7(94)	30.6(103)	53.3(99)
	4下・9.3株*		6.5	26.1	11.8	24.2(100)	29.7(100)	53.9(100)

Z; () 内は*印区に対する比率%

3. 考 察

(1) 莢型と水洗後の土壌付着についての検討

莢の外観品質が良いことが重要であるが、莢の外観を損なう原因としては、洗浄不良による付着土壌、莢褐変症、コガネムシ等の食害などが考えられる。これらの中で品種選定により回避できるものとしては、水洗後の付着土壌と、品種系統間で発生程度に差がみられる莢褐変症が考えられる。

くびれの深い莢で水洗後の付着土壌が多いことは生産者からも指摘されていた。この両者を数値化するために、莢のくびれ程度と付着土壌について検討した。莢のくびれの程度は従来から'浅い'から'深い'の5段階評価で表し、莢の幅は第1図での'幅2'の長さで表すことになっている。本試験においては、第1図での'くびれ'を'幅1'で割った値を'くびれ度'として表すことによってくびれ程度の数量化を試みた。付着土壌については極微量であり重量等の数量化が不可能なため客観評価とした。莢のくびれが浅い品種は、先豆と元豆の接触面が大きくなり子実が短めになる傾向がある。塩南京などでは子実がやや長めの方が好まれる傾向があるが、'ユ

デラッカ'程度であれば煎り加工においても問題はないと考えられる。一方、莢褐変症のうちリゾクトニアによる莢褐斑病以外のものについては原因が明かでなく、当面は発生しにくい品種を利用する必要がある。

(2) 有望早生品種系統の選定および特性調査

'関東62号'および'関東63号'は、成熟期が'ユデラッカ'や'タチマサリ'に比べ3日程度早いため、当初は早期収穫の面で有望と考えられた。しかし、いずれの系統も所内試験および現地試験ともに'ユデラッカ'に比べてくびれが深く莢褐変症の発生が多く、さらに食味も劣ることから、ゆで豆用として劣ると考えられる。

'ユデラッカ'は、'タチマサリ'に比べ開花期はやや遅れる傾向がみられるものの成熟期はほぼ同程度であり、選定目標の1つである'タチマサリ'並みの熟期では問題がないと考えられる。また、'ユデラッカ'は'タチマサリ'に比べてくびれの程度では差が小さいものの、莢褐変症の発生程度と食味で明らかに優っていた。'ユデラッカ'の食味については、千葉県農業試験場落花生研究室⁴⁾で実施した官能試験においても'タチマサリ'に比べ甘さやおいしさの点で有意に優っていると報告している。'ユデラッカ'は、おいしいことや外観品

質が優れていることに対する消費者の要求が高まる傾向があるなか、‘タチマサリ’に替わるゆで豆用品種として最も適していると考えられる。‘ユデラッカ’の生育上の特徴としては、主茎長と分枝長が短く、地上部の生育量が少なく倒伏しにくいことがあげられ、密植による増収の可能性が考えられる。

(3) ‘ユデラッカ’に適した栽培法の検討

栽培技術の面から収穫の早期化を考えた場合、温度の確保による初期生育の促進が考えられる。トンネル被覆によるゆで豆用ラッカセイ栽培については既に検討されているが²⁾、本試験ではトンネル被覆よりも省力化がはかれるべた掛け資材の利用について検討した。開花期の早期化については、べた掛け被覆とトンネル被覆はほぼ同程度の効果があると考えられる。地上部の初期生育の促進効果を主茎長と比較すると、べた掛け利用では除去後はマルチのみと差が明かではなかったが、トンネル被覆ではマルチのみより全調査時期で長いことが明らかになった。これは、トンネル資材の除去が開花後23日目と遅くなったため、‘ユデラッカ’が軟弱徒長気味の生育を示したためと考えられる。べた掛け被覆は、7月下旬の出荷可能莢重がマルチのみおよびトンネル被覆に比べ30%以上増加したことから、早期の収量増加に極めて有効と考えられる。

べた掛け資材は、軟弱野菜などで広く使われていることから資材の有効利用の面からも、また、鳥害対策としても効果が高いことから、今後ゆで豆用ラッカセイの早期収穫技術の1つとして積極的に利用すべきであると考えられる。

マルチ栽培の播種期は一般的には5月上・中旬であるが、べた掛け資材を利用して4月中旬に播種することにより7月中旬よりゆで豆の早期収穫が可能であることが明かとなった。栽植密度としては、 $6.9株m^{-2}$ では十分な収量が得られないことが明かとなった。

$11.1株m^{-2}$ 区と $9.3株m^{-2}$ 区の出荷可能莢重の比較では、年次により異なった傾向がみられた。これは、8月上旬までの気温が1991年は高温で、1992年はやや低温で経過したことなども関係すると考えられるが、今後さらに検討する必要がある。

摘 要

‘タチマサリ’に替わるゆで豆用ラッカセイ品種を選定するために、ゆで豆に適した莢の形状や外観品質等について検討し、‘ユデラッカ’を推奨品種に選定した。

また、‘ユデラッカ’を利用したゆで豆用ラッカセイの早期収穫技術についても検討した。

1. ラッカセイ莢のくびれが深いほど水洗後の土壌の付着が多く、くびれ度(莢のくびれの幅/莢幅)が0.66以上の莢型が水洗しやすいことを明らかにした。
2. ‘ユデラッカ’は、莢のくびれが浅く莢褐変症の発生も少なく、また食味も良好なことから‘タチマサリ’に替わるゆで豆用の早生ラッカセイ品種として適していることを明らかにした。
3. ‘ユデラッカ’を4月中旬に播種し、べた掛け資材で播種期から開花期まで被覆することにより、7月中旬より収穫が可能であった。また、この場合の栽植密度は $9.3株m^{-2}$ ~ $11.1株m^{-2}$ の密植が適していた。

引 用 文 献

- 1) 土屋恭一・広瀬一郎(1994)農業技術., 49, 7, 299~303
- 2) 中山兼徳・高橋芳雄(編著)山本実・石田康幸・石井良助(著)(1976)ラッカセイのつくり方, 農山漁村文化協会, 159~162
- 3) 農事試験場畑作部作付体系第2研究室・千葉県農業試験場落花生育種研究室(1972)落花生調査基準
- 4) 鈴木一男ら(1990)千葉農試研報., 33:51~66
- 5) 宇田川晃(1983)新しい病害虫, 全国病害虫専門技術員協議会, 8305

SUMMARY

The peanut has been used as 'roasted pods', 'roasted or fried peanut' in usual. But recently, 'boiled pods' of peanut is getting popularity and the new variety of peanut for 'boiled pods' is demanded.

On the selecting of the good variety for 'boiled pods', extremely early maturing same as 'Tatimasari', good pods form and external appearance of pods especially not soiling were considered to be important.

The pods for 'boiled pods' were washed well with water to remove soil attached on the surface at harvesting. The amount of soil on the surface of the pods after washing was decreased according to decrease of constriction rate of the pods.

'Yuderakka' was recommended as a good variety for 'boiled pods' because of its slight constriction rate of pods, good external appearance, high-yielding and good taste.

Through the harvest date of 'Yuderakka' was the same as 'Tatimasari', but the length of mainstem and of the longest branch were shorter, the mature podweight for 'boiled pods' was higher, the external appearance of pods and seeds taste was better than 'Tatimasari'.

To make the harvesting time of 'Yuderakka' earlier up to July, sowing in second ten days of April and to covering by the material of row covering until flowering time were effective.

The optimum planting density of 'Yuderakka' was 9.3~11.1 plants per 1 square meter in the case of early-harvesting.